

上原賞受賞者

(五十音順)



受賞者氏名：岡野 栄之（オカノ ヒデユキ）博士（医学）

所属機関および役職：慶應義塾大学 医学部 教授

生年月日 1959年1月26日生

略 歴 1983年3月 慶應義塾大学医学部卒業
1983年4月 慶應義塾大学助手（医学部・生理学教室）
1985年8月 大阪大学助手（蛋白研究所）
1989年10月 米国 Johns Hopkins 大学医学部研究員
1992年4月 東京大学助手（医科学研究所）
1994年9月 筑波大学教授（基礎医学系）
1997年4月 大阪大学教授（医学部）
2001年4月 慶應義塾大学教授（医学部・生理学教室）（～現在）
2007年10月 慶應義塾大学大学院医学研究科委員長（～2015年3月）
2008年12月 オーストラリア Queensland 大学客員教授
2015年4月 慶應義塾大学医学部長（～2017年9月）
2017年10月 北京大学医学部客員教授
2017年10月 慶應義塾大学大学院医学研究科委員長（～2020年9月）
2021年6月 Head of International Advisory Board, Stanford Laboratory for Drug/
Device Development and Regulatory Science (SLDDDRS), Stanford University

受賞対象となった研究業績

「幹細胞システムを用いた中枢神経系の再生医学と疾患研究」

ヒト成体中枢神経系は、高度な機能を発揮するその一方、損傷に対して非常に脆弱であり、長年「再生しない臓器」の代表であった。岡野栄之博士は1990年代に、ショウジョウバエの神経発生に異常を示す変異体の中から、RNA結合蛋白質 Musashi の変異体を同定し、同 Musashi 分子が転写後レベルの遺伝子発現調節により、幹細胞制御において重要な役割を果たすことを明らかとし、同分子がショウジョウバエからヒトに至るまで進化で保存されていることを発見した。1998年には、米国との国際共同研究により、Musashi を指標として用いて、ヒト成体脳に神経幹細胞が存在することを世界で初めて明らかにした。その2年後の2000年には、これらヒト成体脳神経幹細胞を FACS により分離することに成功し、これら一連のパラダイムシフトにより、本来再生しないと考えられていたヒトの中枢神経系の再生を目指した「ヒト中枢神経系の再生医学」という新しい研究領域の構築に繋がった。その後20年に渡り、神経幹細胞や iPS 細胞技術を用いた脊髄損傷の再生医療の開発、神経難病の ALS の新薬開発研究とその医師主導治験（ROPALS 試験）など一貫して、ヒト成体中枢神経系の再生医学領域における数々の顕著な成果を上げており、国際的な注目を浴びている。